

平和を願い、戦争のない世の中をつくっていくために



6月23日は沖縄慰霊の日でした。沖縄では、太平洋戦争末期の1945年3月26日、アメリカ軍が沖縄・慶良間諸島に上陸して地上戦が始まり、日米で計20万人を超える死者、そのうち推計約9万4千人、実に島民の4人に1人が亡くなるという、想像もできないような惨状にみまわれました。

私は20代の頃、先輩の先生方と一緒に沖縄へ行き「沖縄の過去と現在」を学びました。那覇空港から車で少し行くと、もうそこは本土とは違いました。有刺鉄線の向こうに米軍基地が広々と見えてきたからです。知識としては知っていましたが、日常生活のすぐそばに基地がある實際を目の当たりにし驚き、現実なんだ、と受け止めざるを得なかったことを覚えています。

次に、沖縄戦などの犠牲者名を刻んだ「平和の礎」を訪問しました。そこはアメリカ軍が上陸した場所です。今は本当に青く美しい海。そこに向かって、数え切れないほどの黒い石碑が整然と立ち並び、そこにはびっしりと戦没者名が刻まれていました。その名前を拝見しながら、さぞかし無念であったであろう、つらかったであろう、怖かったであろう、どうしてこんな目に遭わなくてはいけないのか・・・この20万以上の戦没者お一人お一人には、かけがえのない人生があって、大切な家族がいて、幸せに生きたいというささやかな願いがあって・・・そんなことを思いながら手を合わせ、涙が止まらなかったことを思い出します。

防空壕として使われた自然の洞窟「ガマ」にも行きました。沖縄には多くのガマがあります。そこでも多くの命が失われました。私は「チビチリガマ」という有名なガマを訪問しました。狭く暗い、じめじめしたその洞窟は、今にも敵に見つかりそうで、こんなところにしか逃げ場がなかった恐ろしさを感じました。



日本軍の指令施設跡にも行きました。地下深く、網目のように通路が掘られ、やはり狭く暗い場所でした。展示室には司令官の家族宛の手紙がありました。、幼い我が子に向けて「お母さんの言うことをよくきいて優しいよい子に育ててください」妻に向けては「庭の花はもう咲きましたか・・・体をいたわってください」など、戦争とは全く関係の無い内容が書かれていました（それしか書けなかった時代です）。どれだけ本心で語りたかっただろう、胸の張り裂けるような思いでその手紙を拝見しました。その司令官は、その手紙を書いた翌日、戦闘で亡くなったそうです。

私も戦後生まれの一人です。私達は戦後81年、日本が直接戦争をしてない時代に生きています。しかしこれが当たり前ではありません。だからこそ、平和の大切さ、一人一人を大切に思う心を育み、伝え続けていかなくては。（7月 文責：校長 池田明子）